

序文

培地を観察している3人の微生物検査技師に出会ったとします。そして、それぞれに「いま、何をしていますか？」と質問してみると、次のような返答がありました。1人目のA技師は「見てのとおり、菌を釣っているのだ」、2人目のB技師は「見てのとおり、菌を同定・感受性機器にかけようとしているのだ」、3人目のC技師は「見てのとおり、グラム染色像と患者背景とを加味して起炎菌を捉えようとしているのだ」。どの技師も、やっている行為は“培地を観察する”ことで共通しています。しかし、それぞれの返答は違います。それは見えているところが違うからです。

よりよい技師になるためには、「自分がやっている目の前の取り組みが何につながっているのか」を見いだすことが重要です。コロニーを拾うだけの技師になるのか？ なんでもすぐ機器にかける技師になるのか？ 起炎菌を捉えられる技師になるのか？ 私は、ただ業務として仕事をするのではなく、志を持って“志事”^{しごと}をすることこそが大切だと思うのです。そして、この志を導く上司(師匠)の存在もまた欠かすことができません。

本増刊号には、微生物検査実践のためのエッセンスが詰め込まれています。しかし、実際の内容に入る前に、まずはプロローグとして、微生物検査技師の皆さんの心にとめておいてほしい“志事”^{しごと}について、お伝えしたいと思います。

微生物検査の“志事”と特殊性

■ 感染症の診断と治療に直結する検査データ(情報)を提供する仕事

1. 臨床微生物検査部門には医師がいない

微生物検査技師は“診断”のためのデータを握っており、診断結果を直接左右する重要な役割を担っています。例えば、結核菌を見つけて同定したら、結核症の診断がつきます。百日咳、赤痢、梅毒などもそうですね。

培地に発育したその集落をあなたが起炎菌だと判断できなかつたら、釣菌しなかつたら、どうなりますか？ その感染症が見逃されてしまうでしょう。まさしく、「感染症検査技師」「感染症診断技師」だと思いませんか？

2. 患者の生死にかかわる“一刻を争う”状況で検査を行うことがある

髄膜炎、敗血症、壊死性筋膜炎は、迅速かつ正確な起炎微生物の決定や薬剤感受性データの提供が必須の病態です。当然のことながら、微生物検査技師の働きは治療選択をも左右する重要なものです。

■ “いきもの”係の仕事

1. “いきもの”は居心地のよい環境で育てないとわれわれの前に姿を見せてくれない

使用培地、培養環境、培養期間などの分離培養条件は合致していますか？ 微生物の居心地のよい環境を作ることができる微生物検査技師でなければ、感染症の原因となっている微生物を見逃すことになってしまいます。

2. 夜間・土曜日・日曜日・祝日・年末年始でも“いきもの”にはお世話が必要

微生物検査技師の仕事は、適切なタイミングでの鏡検や培養がキーとなります。

ここで再び、質問です。17時15分(終業時間がリアルですね)に血液培養陽性のシグナルがなりました。しかし、18時にはデートの約束があります。さて、あなたは どうしますか？ アラームの音が聞こえないふりをしますか？ 目の前の検体が、自分の一番大切な人から採取されたものだったら……。それでもあなたは、ボトル内の微生物に見向きもせずに戻りますか？ デートは とても大切です。働き方改革で難しいご事情もありでしょう。でも、少しでも立ち止まって、微生物とその先にいる患者さんに思いをはせてみませんか？

■微生物と会話する仕事

1. 検査は限られた状況で行われる

微生物検査において、全ての菌種をカバーするような培地や診断キットはなく、鏡検で全ての微生物が見えるわけでもありません。また、測定項目(検出菌種)があらかじめ決まっているわけでもありません。

さらに、喀痰、尿、膿汁など常在菌の混入を避けられない検体もあるでしょう。常在菌のレベルである菌種や菌量の細菌を報告すると医師が誤って治療を施してしまうこともあります。

では、忙しい業務のなかで、どうやって“効率的な検査”を行えばよいのでしょうか？

2. 菌は嘘つかない！

検出された細菌を素直に全て同定して感受性試験を行っても、患者さんの利益につながらないことがあります。医師が検査をしているわけではないから、取りあえず拾っておこう、取りあえず機器にかけておこう、取りあえず報告しておこう……。 “取りあえず”の3連発でかえって自分の首を絞めていませんか？ もっと違うことに費用と時間をかけてみましょう。「忙しくて、患者情報を見ている時間なんてない！」と、そんな状況にしているのは、もしかしたらあなた自身なのかもしれません。

臨床背景と臨床情報を十分に把握したうえで検査を行わなければ、患者さんの感染症診療に真に役に立つ検査データを提供することはできません。皆さんが日々積み重ねた“知識・経験・匠の技”を融合して菌に向き合えば、効率的でよりよい微生物検査につながることは間違いありません。菌は嘘をつかないのです。

3. 悩んだら、“原点回帰”しよう

忙しくて仕事に嫌気がさしたり、同僚や上司に腹が立ったりすることもあるでしょう。そのようなときには、人の役に立ちたいとの“志”をもって医療人、技術職の臨床検査技師を志したころの自分に“原点回帰”することも必要です。「目の前の検体が、自分の一番大切な人から採取されたものだったら……」。本増刊号をめくりながら基本に立ち返り、微生物検査技師としての歩みを進めてもらえれば、望外の喜びです。

東京医科大学微生物学分野

大楠 清文